

秋田における温泉利用の現況と その効用について

秋田大学医学部 奥原英二

忙中しばし閑をみつけて鄙びた出湯に浸り、日頃の疲れをいやすのは最も日本的な温泉利用法であるが、もしも温泉治療を好適とするような患者にとって治療効果が約束される泉質で且つ医師が常に居てくれる温泉があったら何程心強いことであろう。秋田県は温泉には大変恵まれており、且つ脳卒中多発県でもあるので条件さえ揃えば温泉病院の設立の実現度は極めて高いことになる。代表的なものとして現在本県には2つの医師会立温泉病院が開設されている。本荘市の本荘病院と雄勝町の秋の宮老人医療センターである。前者は設立後すでに10年で、最近さらに増設拡大され、その実績が高く評価されている。泉質、環境、医師の三条件が揃っており且つ交通の便に恵まれているので今後ますますの温泉治療における貢献が期待される。後者は開設後まだ3年であるが、温泉病院としてのみならず、地域医療のセンターとしての役割と、ねたきり老人の暗さからの解放を旨として着実な発展を遂げつつある。

これらの病院は新しい地域医療の体系化として建設されたりハビリを中心とした地域医療のセンターである。経営が医師会であるのが特徴である。従って地域住民がより密接な関連性において、よりよい医療の恩恵を受ける機会を与えられたことになる。本県が脳卒中多発県であることから、このようなりハビリテーションを中心とした温泉病院の建設は急務であった。温泉病院の建設にあたっては、利用できる適当な泉質の温泉の確保が第一に要求されることであるが、本荘病院の場合は、市のガス試堀に際して噴出した温泉の泉質が含重曹弱塩泉で脳卒中などのリハビリテーションに最適であるとの秋田県環境衛生部技監の談話が、内藤賢一院長をして本病院の設立を提案させ、且つ決意させるにいたった動機だったという。

秋の宮病院(齊藤敏昭院長)は本荘病院をモデルとして設立され、泉質も殆んど類似している。両病院ともほぼ同数(120床)のベットをもち、常時満床を続けている。本荘の場合は開設以来入院患者数は延33万人を越えており、さらに50床を増築する計画とのことである。医師会立の温泉病院は東北北海道にはこれらの二病院があるのみとのことで、これらの果す役割の重大さは限らないものがあるといえよう。

次に病院の開設には至っていないが種々の疾患に対する効能の顕著な温泉として古くから知られている矢立温泉についての私の疫学的調査結果をのべ、さらにその泉質の特徴と作用機序について簡単にふれてみたい。

矢立温泉は青森との県境に近い矢立峠の下にある由緒ある湯治専門の温泉である。わが国の温泉医学の盛んになりはじめた頃、ある2~3の著名な医学者が、この泉質がかの有名なカルスバードのそれに似ているということから、東洋のカルスバードと絶讃された。

この温泉は鉱泉で加熱すると赤褐色になることから一名赤湯ともいわれている。ひょんなことからこの温泉の効能に興味をもち、ある医師の協力を得て疫学調査をしたところ、疑いなく有効な温泉であることを観察出来た。その泉質および効能は山梨県の下部温泉に大変似ているそうである。ドラマチックな効果を体験した人々の調査結果並びに有効例については、趣味のエッセイとして北海道医学雑誌(46巻6号)および日本医事新報(No.2542一昭48.1.13; No.2585一昭48.

